

2013年度 センター試験 世界史B (本試験) 分析

全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：4 題	解答数：36 問
難易度の変化（対昨年）	難化 やや難化	変化なし やや易化 易化
問題の分量（対昨年）	増加	変化なし 減少
出題分野の変化	あり	なし
出題形式の変化	あり	なし
新傾向の問題	あり	なし

総評

例年通り、テーマ史らしいリード文を用いながら広い範囲の小問を集めた形式をとっており、大問4題・総解答数36個という出題の分量も昨年と全く同じである。全体としては各範囲をバランス良く問うものであった。ただし今年度は第二次世界大戦後の現代史の小問が1つしかなく、現代史の比率が例年よりも低かった。また、文化史の小問も2つのみであり、こちらの比率も低下した。

出題形式では、昨年5題に増加した用語自体をそのまま選択させる問題が、引き続き5題出されており、例年大部分を占める正誤判定問題については、昨年7題に増加した2文の正誤組み合わせ問題が、引き続き7題出されている。しかし、写真や絵を見せる問題については、昨年のような美術品の名称(唐三彩)を求める問題は出されなかった。そして一昨年1題 昨年2題だった地図問題が3題に増え、年表形式の問題が新たに1つ出されている。年代整序問題は3題から2題に、特定の世紀・時期に該当するものを選ぶ同時代史問題は2題と、例年より減少している。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	世界史上の法をめぐる問題	25点	センター試験らしく、西洋史・東洋史の幅広い範囲からの出題となっており、また古代～20世紀までの幅広い時代にまたがる問題である。その中で、年表の空欄補充の問題や地図問題も含むため、高得点のためには総合的な力が要求される。
第2問	世界史上の都市と経済	25点	幅広い範囲の中で、今回は出題の少ない戦後史・文化史が含まれる大問。その中で、A - 問3は文化史事項の並べ替えであった。また、C - 問7は、北米自由貿易協定 (NAFTA) やアジア太平洋経済協力会議 (APEC) という、広域経済協力機構を扱う問題であり、近年の教科書や入試問題の動向をよく反映した形になっている。
第3問	世界史上の宗教	25点	幅広い範囲設定・出題形式の多様さ・正誤のポイントの難易度など、センター試験らしい非常にオーソドックスな大問である。写真が2点用いられているが、問題を解く上では必要がないという点も、センター試験らしい特色である。全般的に高得点を狙える平易な大問であろう。
第4問	世界史上の君主や王朝	25点	A - 問1やC - 問9でハワイ王国の滅亡の時期や南アフリカ連邦の成立時期を扱い、A - 問2はアチェとオケオの地図問題であるなど、受験生が意外に取りこぼしそうな内容が含まれる。また、C - 問8では、選挙法改正に関する労働者の区分を扱うなど、少し掘り下げた知識を求めているため、第1問と同様に、総合力を要求される大問である。